

## 辛い1日(1995年3月号掲載・向井 良)

1月21日午前8時、連日の救助活動の合間をぬって、ほんの僅かの仮眠を終えたところへ新たな任務が言い渡された。

鉄筋コンクリート造4階建てのマンションの2階部分が崩れ、4名が生き埋めになっているというもので、地震発生以来、他の隊が何度か救出を試みては断念している現場だった。救出はかなりの困難が予想される。

現場に重機(ユンボ)担当の大野さんと到着してみると、生き埋めの4名がいると思われる2階部分には3、4階が非情にも重くのしかかっていた。

「無理かもしれない。無理や」

この状況を見た隊員は、皆そう思ったに違いない。でも、「もしかしたら・・・」

そんな僅かな希望を胸に救出作業を開始、必要と思われる資機材を2階に搬送した。

その時、我々が見たものは、冷たく変わり果てた大人と子どもの遺体だった。2人は見るからに重そうな鉄骨の下で、大きな体が小さな体を庇うように横たわっていた。何とも酷い最期に、各隊員は交わす言葉もなく、瓦礫の撤去作業を進めた。重苦しい空気の中で作業は続く。

さらに2人の方も遺体で発見された。一緒に眠っていたのか、同じ布団の中で母親が子供を庇うようにして亡くなっていた。

指令を受けた時から予想できたこととはいえ、実際に現場に立ち会ったときの気持ちは言い表すことができない。瓦礫を取り除くためのエンジンカッターや重機の爆音が無常に響いた。

一人また一人と、収容された遺体が家族に引き渡され、最後の一人となった8歳の子供が収容された時、父親らしい男性の目から堪えていた涙が一気に溢れ出していた。

太陽が西の彼方に沈もうとしている。救出時間8時間。辛い1日だった。